第 38 回「出雲ブランドの玉と、松江の小豪族が手に入れた玉～「松江の石をめぐるヒストリー」より～」

（松江市文化スポーツ部文化財総合コーディネーター/丹羽野裕/ 2023 年 11 月 21 日記）

【写真 1】花仙山の緩やかな山並み

松江市の玉造温泉周辺では、その名の通り、古墳時代にたくさんの玉を作っていました。古代の玉は、勾玉、管玉、丸玉などを、メノウや水晶などの美しい石を割って磨いて作っています。玉造で玉が作られたのは、近くにメノウが採れる山、花仙山【写真 1】があったからです。花仙山のメノウは、青、赤、透明と原石の部位によって違う発色をしているため、古墳時代前期後半（4 世紀頃）からカラフルな玉として、全国に流通しました。

メノウを使った古墳時代の玉は、大部分が古墳に遺骸とともに副葬されました。古墳を築くことや上質な副葬品の入手には、当時の中心だったヤマト王権（以下ヤマトと呼びます）（注記）の関与がありました。出雲で作られた玉も、ヤマトを経て全国の豪族に配布されたと考えられています。出雲の玉作り集団をまとめていた当時の親方（有力な豪族）は、ヤマトから発注を受けて玉を供給する代わりに、優位な地位を得ていたものと推測されます。

さて、出雲の玉の材料として重用された石に、青メノウ（碧玉）があります。不透明な緑色にガラス質が強い石材で、おもに勾玉や管玉の材料として利用されました。近畿地方はじめ、他の地域の有力豪族の古墳から出る青メノウの玉は、深く濃い緑色で、独特の風合いを持ったものが大部分です。ヤマトの傘下にあった地域では、出雲ブランドとして均質な深緑の玉が重宝されていたのです。【写

真２】は京都府の園部垣内古墳（４世紀頃）から出土した、出雲の青メノウで作られた勾玉と矢じり形石製品です。ともに均質で深い緑色をしていることがわかります。出雲の玉が使われる以前に利用されていた、北陸地方の青メノウや緑色凝灰岩は、色が薄くて光沢が少ないのと対照的で、出雲が玉作のメッカになっていく一つの要因だと考えられます。下の鳥取県上ノ山１号墳の青メノウ勾玉【写真３】も同様です。

左【写真 2】京都府園部垣内古墳出土の勾玉と矢じり形石製品

右【写真 3】鳥取県上ノ山１号墳出土の玉類（勾玉は出雲製の青と赤のメノウ、管玉は北陸の碧玉製）

一方で、松江市周辺の小型古墳から出てくる青メノウの玉の中には、イメージが違うものがしばしば見られます。下の【写真４】【写真５】は松江市西浜佐陀町釜代１号墳（４世紀）と東津田町櫨岡古墳群（４世紀）から出てきた勾玉です。出雲ブランドの玉に比べて少し色が薄いですが、その代わり磨かれて石の目が現れ、蛇の目や線のような模様が浮き出ています。

【写真 4】西浜佐陀町釜代 1 号墳出土勾玉

【写真 5】東津田町櫨岡古墳群出土の勾玉

次の【写真６】は、松江市浜佐田町石田古墳から出土した管玉です。左の管玉は石の目がはじけたような模様が浮き出て、花のようにも見えます。右の管玉は緑の濃淡がマーブル状に層をなしており、見る者の目を引き付けます。

【写真 6】浜佐田町石田古墳出土の管玉

最初の【写真２】【写真３】のように、均質で濃い深緑色が出雲ブランドだとすると、これらの玉は規格外品の材料で作られたことになります。しかし出雲の玉作の職人たちが、捨てるはずの不均質な石に美しさを見出して、これらの玉を作ったように私には思えます。一級品として出荷できなくても、このような石の特徴を活かした玉を計算して作ったのではないでしょうか。そして本来、玉を手に入れることが難しい、地元の小地域の首長たちに、配られたと想像します。職人集団と小地域首長の間を取り持ったのは、出雲の大豪族ではないでしょうか。ヤマト中心の古墳システムの中で玉作を受け持った、出雲の大豪族の粋な計らいと考えてみると、ちょっとワクワクします。想像が行きすぎました。

松江のメノウの歴史や特徴については、「松江の石をめぐるヒストリー」をご覧になると、詳しく知ることができます。以下のサイトにアクセスして読んでみてください。

→ 全国遺跡報告総覧：松江の石をめぐるヒストリー（外部リンク）
https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/131528

（注記）現在の奈良県周辺を拠点に、東北から九州にかけての範囲を、古墳を作ることでまとめた政治集団